２０２４／１２／０１　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：真の礼拝への情熱
聖書箇所：ヨハネの福音書　２章１３－２５節

ここまで私たちは、著者ヨハネを通して示されるキリストの偉大さを、１章から少しずつ学んできました。きょうは特に２：１３－２５を中心に見ていきたいと思いますが、皆さん、同じです。続けて明かされている揺るがない真理を、自分のこととして考えてみてください。まずはいつものようにみことばをお読みしますので、それぞれよく見てください。

ヨハネ２：１３－２５

「:13 ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。:14 そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、:15 細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、:16 また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」:17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。:18 そこで、ユダヤ人たちが答えて言った。「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちに見せてくれるのですか。」:19 イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」:20 そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」:21 しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。:22 それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。:23 イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた。:24 しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、:25 また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。」

●ハドソン・テーラー

かつて、１９世紀の中国で活躍した宣教師、ハドソン・テーラーがいました。１７歳の時に救われ、２１歳で上海へと渡った彼は、その生涯にわたって福音宣教に熱心に励んだ人物でした。結果として彼の始めた宣教団体は８００人以上もの宣教師を送り出すことになっただけでなく、少なくとも２万人以上の人々が彼の働きを通して救いへと導かれたと言われています。どんな時も神様に拠り頼んで歩み続けていたハドソンは、確かに神様によって大いに用いられたすばらしい信仰者でした。ただそんな彼の働きも、最初からすべて順調だったわけではありません。上海に渡ってすぐ、その町にあった仏教寺院に初めて足を踏み入れます。そこで彼は大きな驚きを味わうことになるのです。その時の経験が、彼の生涯について綴られた本の中にこのように記されていました。「仏教寺院の中に入ると、ハドソンは男や女が線香を焚き、大きな石の仏像に向かって祈りを捧げているのを見ました。彼はじっとその様子を見守りました。これまでの人生の中で、キリスト教の教会以外のものを見たことがなかったのです。その光景を目にしたときに彼を驚かせたのは、仏教寺院が教会とどれほど異なっているかではなく、石の仏像を拝む礼拝者たちの真剣さでした。もし彼らが生ける神の存在を知ってさえいれば、とハドソンは思いました。」この出来事が、間違いなく後の彼の働きに大きな影響を与えていたことでしょう。生けるまことの神を、救い主イエス・キリストを礼拝するその喜びを知っていた彼は、これ以降その喜びを大胆に宣べ伝えていくことになるのです。そして皆さん、当たり前に聞こえるかもしれませんが、ハドソンのことばにもあったように、どれだけ熱心に礼拝をささげていたとしても、もし、ささげる相手が

そもそも違っていれば、それほど虚しいものはありません。人はみな、まことの神様に向かって、ふさわしい態度、ふさわしい熱意でもって礼拝をささげることが欠かせないのです。そしてこれは、今の私たちにとっても同じでした。

改めて考えてみてください。私たちは今ヨハネの福音書を順に学んでいますが、この書が記された大きな目的を、著者は何だと言っていました？もうさすがに覚えてくださいました？その目的、どこに書いてありますか？その目的は２０章に書かれています。２０：３１を見ていただくと、ここにヨハネの福音書の大きな目的が書かれていました。「**しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。**」書かれた目的、それはただ知識や情報を増し加えるためではありませんでした。その目的は、すべての人がイエス・キリストこそ神の御子、キリストであると信じ、そしてそれによって永遠のいのちを得るためでした。人々は、キリストがいったいだれなのかを正しく知って、その方に正しく応答することが求められていたのです。でも実際にどうなのでしょう？果たしてこの時代から、すべての人々は正しくイエス・キリストに応答し続けてきたのでしょうか？いいえ、そうではありませんでした。イエスの時代から多くの人たちは頑なな心を抱き、主に対して間違った考え、間違った態度を示していました。本来であれば神の御子であるキリストを目にし、その方にこそ信頼し、従い、心からの礼拝をささげるべきにもかかわらず、人々はそれを拒み、それ以外のものを熱心に求めていたのです。そして何よりも問題だったのは、多くの者たちは、そんな自分たちのことを考えるときに、自分たちこそ本当の神様を礼拝しているのだ、と真剣に思い込んでいました。本当の神様を見ていないのに、自分たちは本当の神様をもう見ているのだと思い込んで、イエス・キリストを拒み続けていたのです。

これから私たちが学んでいく今回のこの２：１３には、そんな誤った考えを持っていた者たちが登場しています。そしてそんな者たちに対してイエス様は、ご自分のふるまいを通して、生ける神を礼拝する本当の礼拝者という者がどんな存在なのかを、教えようとされるのです。特に１３－２５節を通して、イエス様が求めておられる真の礼拝者の三つの要素を見て取ることができます。ですから、みことばを通して一緒に考えてみましょう。神様はどんな礼拝を求めておられるのか、そして、自分自身はそんな礼拝を今ささげているのかどうか……。

○真の礼拝者に求められる“三つの礼拝”

１．心からささげる礼拝　１３－１７節

では早速一つ目の要素から考えてみましょう。まことの礼拝者に求められていた一つ目の要素は、「心からささげる礼拝」でした。中身の伴わないうわべだけのものではありません。自分中心の勝手な思いからささげるものでもありません。主の前にふさわしい心を伴った、へりくだった礼拝が欠かせなかったのです。みことばを見ると特に１３節には、今回見ていく場面設定が描かれています。１３節はこのように綴られていました。「**ユダヤ人の過越の祭りが近づき、イエスはエルサレムに上られた。**」読んですぐに気づいたと思いますが、場面は最初のしるしが行われたカナの結婚式から、過越の祭りへと移っていました。祭りが近づいているのを知られたイエス様は、エルサレムの町を訪れていたのです。ここで出てきた「**過越の祭り**」、この過越の祭りは、イスラエルの歴史において最も重要だったと言っても過言ではない、大きな大きな祭りでした。イスラエルの民たちは一年に一回、ニサンの月の１４日、今で言う３月から４月頃に祝われる祭りを通して、神様がエジプトの地にあって成された恵みと贖いのみわざを思い出していたのです。この過ぎ越しの祭りについて以前にも触れましたが、どんなことが神様によって成されたか覚えていますか？神様は、かつてエジプトに奴隷として捕えられていたご自分の民を助け出そうとして、十の災いをもたらされました。特に最後の十番目の災いは、滅ぼすものがエジプトの地を巡って、すべての家の初子を打つ、というものでした。非常に恐ろしいさばきが成されようとしたのです。でもそのさばきから唯一逃れる方法も、神様は民に与えておられました。それは、家の門柱

とかもいに羊の血を塗るということでした。血によって覆われているそれを見たときに、主はそこに滅びをもたらさず、通り過ぎていかれたのです。 初子はただ傷のない子羊の犠牲によって、子羊が流したその血によって救われました。イスラエルの民は、主が通り過ぎてくださったこと、このすばらしい主のあわれみを、助け出されたことの喜びを、決して決して忘れないようにと、何世代にもわたって毎年のように祝い続けていたのです。そんな大切な祭りの時が、また近づいて来ました。

ちなみにこの当時、エルサレムの人口は通常時１０万から３０万人ほどと考えられています。でも、それが祭りの時期になると、皆さんどれぐらいまで膨れ上がると思います？通常１０－３０万人のその町が、祭りの時期になると、なんと約２００万人にも膨れ上がったと言われています。想像できます？いつもの人口の数倍から数十倍の人々が町に押し寄せて来ていました。それは道路だけではありません。建物も町のありとあらゆるところが人であふれていたのです。あらゆる宿屋はもうすでにいっぱいになり、それでも部屋が全く足りないので、多くの人たちは一つの部屋に押し込まれていたりもしたでしょう。まさに人混みの中の人混みでした。こうして、ローマ帝国に住んでいる者も含めてありとあらゆる場所に住んでいたユダヤ人たちは、はるばる旅をしてまでもこの過越の祭りを祝うために町に集まって来たのです。そして、その群衆の中にイエス様もおられました。イエス様はその中で神殿へと向かって行かれるのです。２００万人ほどの人が集まっていました。「**過越の祭り**」というのは、本来であれば神様が成されたみわざを礼拝するものでした。その礼拝する場所である神殿に行けば、本当だったら感謝の声があふれていたはずでした。それだけの人数の人々が奏でる賛美があちらこちらで聞こえてきたはずでした。でも残念ながら、そうではなかったのです。

「**宮**」に到着された時、（この「**宮**」というのは、「異邦人の庭」と考えられていますが）イエス様はそこに全く異なる光景をご覧になりました。その様子が続く１４節に書かれているのです。「**そして、宮の中に、牛や羊や鳩を売る者たちと両替人たちがすわっているのをご覧になり、**」宮に入って真っ先に目に飛び込んできた光景、それは、礼拝者の姿ではありませんでした。宮の中で牛や羊や鳩を販売している者たち、また両替人たちでした。本来であれば礼拝の場所であるべきその主の宮が、礼拝の場所ではなく、商売の場所になっていたのです。この１４節を読むと、もしかしたら今の私たちは不思議に思うかもしれません。動物を売る者たち、両替人たちは、いったいそんな所で何をしていたのだろうと。 でも私たちが歴史的背景を覚えれば、なぜ彼らがそこにいたのかを知ることができます。それぞれ大切な役割を担っていました。まず動物を売る者たちというのは、宮に巡礼に来た者たちがささげる“いけにえ”を販売していました。この当時、宮に巡礼に来た者たちは、みなそれぞれ自分や家族のためにいけにえをささげる必要がありました。そのささげるいけにえというのは、どんな動物でもよかったわけではありません。神様が成し遂げたそのみわざに対する心からの感謝として、あらかじめ定められていたとおりに、完全で、傷もない、汚れのない動物をそこに連れてくる必要があったのです。

少し考えてください。 いけにえをささげるために人々はいろんなとこから来たのですが、連れてくるそのいけにえというのは、完全で、傷もない、汚れのない動物である必要がありました。はるか遠方からやって来る人たちは、今みたいに檻に入れて、車や飛行機でやって来るのではありません。ほとんどが険しい道を徒歩でやって来るのです。ある者たちは約１４０㎞の距離を歩いたと考えられています。１４０㎞とは、ここ大阪からだいたい岐阜ぐらいまでの距離です。皆さん、あした大阪から岐阜まで歩いて行ってください、と言われたらどう思います？それはちょっときつい、と思うかも知れませんが、彼らは険しい道であっただけでなく、それに加えて牛や羊を連れてくるとなると、それは到底、困難な話でした。大変だったのです。だから神殿をこの時担当していたユダヤ人宗教家たちは、神殿で動物を売りました。注意して見てほしいのは、１４節にこう書いていましたね。「**そして、宮の中に**」と。彼らは、宮の外ではありません。彼らは、「**宮の中**」で、それを売っていました。本来であれば礼拝をする場所である宮の中を、この者たちは商売の場に変えてしまっていたのです。

またこれに加えて、さらに問題がありました。神殿を牛耳っていた宗教家たちは、犠牲としてささげられる動物を調べる“検察官”という者も置いていました。神殿に行くと検察官がいるのです。この者たちは動物をチェックしました。たとえ人々が懸命にいけにえを連れてきたとしても、その場で、この動物はきよくありません、この動物は礼拝には受けられません、と拒んで、自分たちが用意していた販売所で新たに買うように、と強制していたのです。ひどい話だと思いません？考えてみてください。例えばもし今の時代、私たちのこの教会でそれがあったとしたら、仮に私たちが朝教会に礼拝にやって来たとします。そして座っているとある人が横にやって来て、「どんな聖書を今使っていますか？」と。私たちがそれを見せたら「あなたの使っている聖書の訳はもう古すぎますよ。その聖書では神様に受け入れられません。ですから今からあそこに並んで、新しい聖書を買ってください。そうすれば、あなたは礼拝することができます。そうすればあなたの礼拝は受け入れられます。」などと言われたら、どう思います？まったくもっておかしな話だと思うでしょう。そんなはずはないと思うでしょう。この時に起こっていたのは、そういう事でした。そんな悪や不正が横行していたというわけです。

また問題はこれで終わりではありませんでした。宮には、いけにえを売る者たちに加えて、両替人たちがいました。そのことばの通りに、宮に巡礼してきた者のために両替をするのが彼らの役割でした。なぜかと言えば、この当時宮に礼拝をしに来た１９歳以上のすべてのユダヤ人は、“神殿税”を収める決まりになっていました。税を納めないといけなかったのです。でもそれと同時に、その神殿税というのは、あらかじめ神殿側が定めた貨幣で支払う必要がありました。もう決まった貨幣で払わなければならなかったのです。あらゆる地域からはるばるやって来た人たちは、自分たちが普段用いていた貨幣をそのまま用いることはできませんでした。彼らは税を払うにしても、いけにえを新たに買うにしても、その時に必要な貨幣を両替してもらう必要があったというわけです。神殿を牛耳っていた者たちは、結果としていろいろな部分で破格の手数料を取って自分たちの懐を肥やしていました。何が起こっていたのか想像できます？本来であれば神様をただ崇めるその場所、ただ神様を愛するその場所、ただ神様を賛美するその場所、その礼拝の場所が大きく様変わりしていました。本来なら聞こえてくる賛美ではなくて、いつまでたっても鳴き止まない牛や羊の鳴き声で満ちあふれていたのです。本来なら聞こえてくるはずの感謝や喜びの声ではなく、お金を数えるその音が絶えなかったのです。神様にささげる礼拝と祈りの聖なる場所のはずが、不正と腐敗にあふれた、そんな商売の場所へと変わってしまっていたのです。それが、イエス様がご覧になった光景でした。

そしてそれをご覧になったイエス様は、ある行動を取られます。その行動が続く１５－１６節にこう記されていました。「**:15 細なわでむちを作って、羊も牛もみな、宮から追い出し、両替人の金を散らし、その台を倒し、:16 また、鳩を売る者に言われた。「それをここから持って行け。わたしの父の家を商売の家としてはならない。**」宮に足を踏み入れられたイエス様は、そこで広がる惨状を見て見ぬふりはなさいませんでした。宗教家たちや祭司たちが自分たちの思いのままに宮を変えてしまっているその状態を放置することはしませんでした。イエス様は入ってすぐに必要なことを成されるのです。正しい義なる怒りを示された主は、羊も牛もみんな、そこで商売していた者もみんな、すべて追い出してしまわれたというわけです。これは凄い場面でした。これを読んで皆さんはどんなイメージを思い浮かべるか分かりませんが、私は小さい頃から紙芝居やいろんな動画を見ながら、この場面は、数匹の動物がいてそれを出されているようなイメージを持っていました。背景を見た時に言いましたが、皆さん考えてみてください。この時どれぐらいの数の動物が宮の中にいたのかは具体的には分かりませんが、約２００万人の人たちがやって来て、彼らがいけにえをささげるのに十分な数の動物がそこには用意されていたということです。つまり、少なくとも数千もの動物がそこにはいました。イエス様はそのすべてを追い出されたというわけです。凄いと思いません？イエスはこのようにして、ここでもご自身が持っているその圧倒的な力を明らかにしておられました。神様にしかできないそのみわざをここでも示されていたのです。

皆さんに忘れないでいてほしいこと、それは……確かにイエス様はあわれみに満ちたお方です。優しさや親切さに満ちたお方です。先週も見ましたが、婚礼の席にあって新郎新婦が大きな恥をかかないようにと必要な助けを与えられることもありましたし、子どもたちや重荷を負った弱い人たちがご自分のもとへ来ることを喜んで受けられていた、そんなお方でもありました。でも、イエス様はそんなあわれみ深い方であるのと同時に、父なる神様やまことの礼拝に対して、激しい熱意、正しい怒りを燃やされるお方でもあったということです。イエス様は義なるお方でした。イエス様は怒りを表すこともあったのです。

もちろん、イエス様が明らかにしておられたこの怒りというのは、私たちが普段覚えるような間違った怒りとは違っています。私たちはどんな時に怒りを覚えるでしょうか？例えば、私たちは自分が何かを手にしなければ、私たちは自分の思い通りにならなければ、私たちは自分が満たされなければ、怒りを表すことがあります。でも、イエス様は自分自身がいくらののしられ嘲られたとしても、憤りを抱くことはありませんでした。覚えています？苦しむ十字架の上でさえ、イエスはこんなことばを言われていたのです。ルカ２３－３４で、自分自身が苦しみを受け、いろんな人に嘲られ、周りに兵士がいる中で、このように言われていました。「…**「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」**」イエス様は自分のことに対して怒りを燃やすことはありませんでした。では、いったい何に怒りを示されていたのか？それはご自分の父が侮られ、その家が踏みにじられたことに対して、でした。自分自身のことではなく、自分の愛する者の名誉が汚されたその時、主はご自分が持っておられる愛のゆえに、怒りを表されていたのです。私たちは感情に支配されることがあります。でも、イエス様は感情に支配されていたわけではありません。怒っておられる時も、イエス様の動機には、イエス様のうちには、愛が絶えることはありませんでした。ご自分の持つ愛を、イエス様は正しい怒りというかたちで示されていたのです。 こうしてイエス様は、神様の栄光のために、礼拝のために造られたその聖い主の宮が、腐敗に満ちた商売の家とされていることを、決して良しとはされませんでした。神様が定めているものを勝手に変えることを許さず、自分の望みを果たすために、自分の欲を満たすために神様を用いているという現状も許すことはされませんでした。主の、宮に燃える情熱、主の、まことの礼拝に燃えるその情熱は、宮をきよめるというかたちで現れていたのです。そしてそんなイエス様の持っておられる熱心さや情熱、愛というもの、そういった光景は凄いものだったでしょう。

それをイエスの弟子たちは目の当たりにします。それを見た弟子たちの様子が、続く１７節にこう書かれていました。「 **弟子たちは、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い起こした。**」と。ここで弟子たちが思い起こしていたのは、詩篇６９：９のみことばでした。彼らはかつてのダビデのことばを通してイエス様の姿に目を留めていました。主の宮に対して、ダビデもかつて情熱を抱いていました。当時のダビデも主の宮に対して熱意を、愛を、情熱を持っていたゆえに、彼の周りの人たちによって苦しめられることも経験しました。でも、それを覚えてなお弟子たちは思っていたのです。それ以上に、イエス様こそが、どれほど主の宮を愛しておられ、それを思っておられるのかということ。弟子たちはそのことを、みことばを通して思い起こしていました。イエス様の熱意を見て取ったのです。イエス様はただ約束の救世主として、あわれみ深い方として来られただけではなく、父なる神様と礼拝を愛しておられ、それらのものに対して熱意を、真剣に取り扱われる、そんな偉大な神の御子、キリストでした。イエス様は、礼拝をとても大切なものとして扱われていたのです。

ちょっと立ち止まって一緒に考えてみてください。私たち自身はきょう、このようにこの場に集って礼拝をしに来ています。ライブ礼拝を通して主に賛美をささげようとします。でもそのような礼拝の場に集う時に、私たちの心の動機はいったいどんなものを抱いているでしょう？今ではもう牛や羊を販売したり、お金を両替するようなことはないでしょう。でもどうです？私たちは果たして礼拝の場に集ってくるその時に、礼拝にふさわしい心の態度を持っているでしょうか？それとも、何かしら自分自身が

ささげる、ではなくて、何かしらいつも自分自身が受けることを、何かしら自分にとっての益となるから、何かしら自分の望みを満たすことができるから、そのために私たちは礼拝に集っていたりしないでしょうか？果たして私たちは、神様や礼拝に対して、イエス様が持っておられたような情熱、礼拝に対する熱意、礼拝に対する愛、そのようなものを、同じように持っているでしょうか？自分にとってそれが何よりも愛するものであるからこそ、神様を礼拝することが、賛美することが自分にとって揺るがない最も大切なことになっているでしょうか？それとも、礼拝がいつも私たちの優先順位の下にあって、ほかのものが、自分のしたいことが上に来ていないでしょうか？問われるのは皆さん、果たして私たちは本当に主を愛しているのか、ということです。真の礼拝者に問われること、それは、自分中心ではなく、神様に対する心からの礼拝でした。それが一つ目の要素だったのです。

２．栄光に値する方にささげる礼拝　１８－２２節

続けて、真の礼拝者に求められる二つ目の要素は、「栄光に値する方にささげる礼拝」でした。今見たように、礼拝者は心からの礼拝をささげるだけではありません。礼拝を受けるに値するふさわしい相手がだれなのかを、いつも正しく覚えている必要があるというわけです。でもこれはどういうことか？続きのみことばを見てください。自分たちの目の前で動物が追い出されて、両替人の台が倒され、宮がきよめられる様子を見たユダヤ人の宗教家たちは、それを行ったイエス様に尋ねていました。１８節にこうあります。「**そこで、ユダヤ人たちが答えて言った。「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちに見せてくれるのですか。」**」と。どうです？このことばのうちに、彼らの不満や憤り、怒りが読み取れるでしょうか？本来であれば、彼らは己の貪欲さや過ちに気づかせてくださったことを、イエス様に感謝するべきでした。自分たちが正しいと信じて疑っていなかったのですが、そのような自分たちがささげていた礼拝が偽善的なものであったということを素直に認めて、悔い改めて、そして神様に立ち返るべきでした。彼らは感謝すれども、怒りや憤りを示す立場にはなかったのです。でも神殿の運営を担っていたユダヤ人たちはそのようにふるまいませんでした。むしろ彼らは自分たちの正しさを疑わず、自分たちの持っている権利や懐を肥やす計画が妨げられたことに腹を立てていたのです。間違いなく彼らの心には神様に対する本当の愛はありませんでした。自分自身を何よりも愛していた宗教家たちは怒りを覚えて、イエス様に食ってかかるのです。あなたは何者なのか、いったい何様のつもりなのか、何の権威があってさっきのような行動をとったのか、と。そんな問いに対してイエス様は答えておられました。「**イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」**」

かつてイエス様の発したさまざまなことばは、それを聞いた人たちのうちに多くの混乱を招くことがありました。いろいろな場面でなされた多くの発言は、全く人々には理解されず、むしろののしられることがありました。いろんなことばをイエス様は発言されました。でも、その中でもこの１９節のことばほど、大きな誤解を招き、捻じ曲げられ、そして人々がイエス様を攻撃するために使ったものはなかった、と言ってもよいかもしれません。覚えていますか？このことばはいろんな場面で使われました。例えば、イエス様がカヤパや大祭司の前で裁判を受けている時にも用いられます。マタイ２６：５９－６１にこんなふうに書いていました。「**:59 さて、祭司長たちと全議会は、イエスを死刑にするために、イエスを訴える偽証を求めていた。:60 偽証者がたくさん出て来たが、証拠はつかめなかった。しかし、最後にふたりの者が進み出て、:61 言った。「この人は、『わたしは神の神殿をこわして、それを三日のうちに建て直せる』と言いました。」**」彼らはこのことばを、イエス様を攻撃するために使ったのです。でもこれだけではありません。裁判の席だけでなく、イエス様が実際に十字架にかかって苦しんでいるその時にも、彼を憎む者たちはこのことばを用いて攻撃していました。同じマタイ２７：３９－４０にこう書いています。「**:39 道を行く人々は、頭を振りながらイエスをののしって、:40 言った。「神殿を打ちこわして三日で建てる人よ。もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。」**」と。またこれらに加えてこの

ことばは、イエス様が復活したあと、最初の殉教者となったステパノに対する訴えにも用いられていました。彼を捕まえた人たちのことばが使徒６：１３－１４にこのように記されているのです。途中から「…**「この人は、この聖なる所と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。6:14 『あのナザレ人イエスはこの聖なる所をこわし、モーセが私たちに伝えた慣例を変えてしまう』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」**」と。当時の人たちは、イエス様の成された驚くべき奇跡、圧倒的な力を何度も何度も目の当たりにしていたでしょう。イエス様が語られるすばらしい教えを直接耳にもしていたでしょう。でも、それでもなお頑なな心を持つ者たちには、何も理解できませんでした。神様の助けがなかったとすれば、だれも自分の力で真理にたどり着くことなど決してできなかったのです。

そしてそれは、ここでのユダヤ人たちも宗教家も同じでした。イエス様の返答を聞いた彼らはどんなふうに応答しました？彼らはひどい混乱を覚えていました。何を言わんとしておられるのか全く分かりませんでした。だから彼らはこう言うのです。２０節「**そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」**」イエス様のことばを文字通りに受け取り、実際の神殿の話をしていると思い込んだ彼らは、あざ笑っていました。というのも、この時会話がなされていたこの神殿は、紀元前２０年頃からヘロデ王によって再建されていたものであって、この時点ではまだすべてが完成していなかったと考えられています。ちょっと皆さん計算してみてください。紀元前２０年頃、ここがスタート地点です。そしてここから４６年経つと何年になります？だいたい紀元２６－２７年頃です。それが、イエス様が働きを始めた時期でした。そして３年間の地上での働きの集大成としてイエス様は十字架にかかり、天に上られるわけですが、それが紀元３０年頃と考えることができます。イエス様はだいたい３０歳ぐらいからこの地上で働きを始められ、天に戻られたのです。いずれにせよユダヤ人たちは思いました。自分たちの目の前に建っている神殿は、この時点でもまだ完成していませんでした。４６年の月日が経ったのにもかかわらず、できていなかったのです。それを知っていた彼らは、「それを三日で建てる」などと聞いた時に、そんなことはできるはずがない、と思いました。

でもこれは彼らの大きな思い違いでした。イエス様は実際の神殿の話をしていたのではなかったのです。そうではなくイエス様は、当然礼拝を受けるべき存在がいったいだれなのかを明らかにされていました。そしてそれこそが、イエス様ご自身だったのです。イエス様はこの場でご自分が一度死なれるだけではなく、三日目に死からよみがえるということを明らかにしておられました。そして、イエス様の死と復活は、イエス様ご自身が神の御子であること、キリストであることを証明する何よりのしるしだったのです。別のみことばもこのようにはっきりと述べていました。ローマ１：３－４にこのように書いています。「**:3 …御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ、:4 聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。**」と。悲しいことにユダヤ人たちは、律法や昔からの習慣、慣習、実際の場所…そういったものに心が奪われていました。最も見なければならない、最も礼拝しなければならないその神の御子が目の前にいるにもかかわらず、彼らはその方を求めようともせず、自分自身を誇っていたのです。彼らは目の前に真理があってなお、それに気づくことはありませんでした。

でも、イエス様の弟子たちは違っていました。もちろん弟子たちも最初からすべてのことを理解していたわけではありません。イエス様が復活するという話を聞いても全然理解できないことが確かにありました。でもそれでもなおイエス様のことばを覚えていた彼らは、後にその真理を素直に信じたのです。２２節にこのように書いていました。「**それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。**」弟子たちは聞いていたことを実際に見、そしてそのことが真理だったということに気づかされました。

ここで一つ皆さん覚えていてほしいのは、そんな弟子たちの信仰の土台は、イエス様の成したみわざにではなく、聖書とイエス様のことばに根ざしていた、ということです。最も身近にいた弟子たちは、単に凄い奇跡を目の当たりにしたから、何か奇跡的な体験をしたから、イエス様を信じたのではありませんでした。彼らの信仰というのは、いつもみことばの上に立っていました。キリストのことばの上に立っていました。そしてその中に記されているイエス様の姿を知り続けていく中で、彼らの信仰はますます強められ、主を礼拝する者として変えられていったのです。彼らの土台は聖書とイエス様のことばでした。

今の私たちも同じです。皆さん、考えたことがあります？どうして私たちは日々の生活の中で聖書のことばを学ぼうとするのでしょう？どうして私たちは毎週のようにこうして集って聖書のことばを学ぼうとするのでしょう？私たちがこのようにして聖書のことばを学ぶのは、単に知識を蓄えるためではありません。私たちはこの本の中に明らかにされている偉大な神様を、栄光にあふれたそのイエス・キリストを知り、そして、知った者として、ますますこの方を礼拝する者として成長していこうとするのです。私たちは礼拝者としてまず神様のことを、イエス様のことを知る必要がありました。でも、知って終わるわけではありません。それは必ず賛美へと、喜びへと繋がっていくのです。そのためには、聖書のことばを学び続けることが欠かせません。果たして私たちは、今もみことばが教えてくれているその真理を聞き続けることを自分の喜びとしているでしょうか？そのみことばが示してくれている主の姿を正しく覚えること、正しくそこに心を留めること、その方とともに歩むこと、そのことを喜びとしているでしょうか？それとも、何か私たちはすでにゴールに達したかのように、もう自分はいろんなことを知ってしまっているかのようにふるまって、みことばとの時間を取らないということがあったりしないでしょうか？神の御子であるそのお方、一度罪のために死なれ、そして三日目によみがえってくださった賛美と称賛のみが値するお方、そのイエス・キリストに礼拝をささげたいと、そのようにして日々歩んでいるでしょうか？最も見なければならないところを私たちは見ているでしょうか？まことの礼拝者に問われること、それは、栄光に値するお方にふさわしい礼拝をささげることでした。それが二つ目の要素だったのです。

３．献身的にささげる礼拝　２３－２５節

そして最後、まことの礼拝者に求める三つ目の要素は、「献身的にささげる礼拝」でした。戻ってみことばを見ると、２３節にこのように記されています。「**イエスが、過越の祭りの祝いの間、エルサレムにおられたとき、多くの人々が、イエスの行われたしるしを見て、御名を信じた。**」ここには具体的にどんなしるし、どんな奇跡が行われていたのかということについては挙げられていません。もしかしたらほかの場所でも成されていたとおり、イエス様が目の見えない者たちを見えるようにされたり、病を患っている者たちを癒していたのかもしれません。いずれにせよ多くの人たちがしるしを、奇跡を目にし、それによって御名を信じるようになったのです。「**御名を信じた。**」これだけ聞けば、すばらしいことが起こったように思えるかもしれません。でも、ここには深刻な問題がありました。みことばをよく見てください。人々の多くは「**御名を信じた。**」とありますが、何によって信じたと言われていました？多くの人々は、イエス様の教えでも、みことばでもありません。彼らはイエス様の行われたしるしを見て、信じていました。彼らは奇跡を見て信じたのです。さっき見た、みことばに信仰の土台を置いていた本当の弟子とは違い、彼らはしるし、奇跡の上に立とうとしました。自分たちの神秘的な体験の上に、自分たちの見たその偉大な奇跡の上に立とうとしたのです。そしてそんな彼らは、しるしが行われている間は従い、しるしが止んでしまえば離れていくような者たちだったのです。

想像してみてください。この当時の人たちは約束の救世主をずっと待望していた者たちでした。ローマの圧政から救い出してくれる王様をずっと探し求めていたのです。そんな時に、圧倒的な力で様々なみわざを行うイエス様が現れました。多くの者たちはカナの婚礼でなされたことも、神殿で起きたその

出来事ももうすでに耳にしていたでしょう。様々な不思議なみわざを見て彼らは興奮したでしょう。自分たちの望みを叶えてくれる救世主が来たのだと、そう感動していたでしょう。でもそんな彼らの内側を、主はだれよりもご存じでした。彼らが本当に何を求めているのかを、イエス様は知っておられました。人が一時的には熱中していてもすぐに冷めてしまうような性質を持っていることも、人が瞬間的な感情や興味に流されやすく、犠牲や自己否定を問われるようになればそこから離れていくような性質を持っていることもご存じでした。彼らが本当の弟子でないこと、本当の信仰を持っていないことをイエスは見抜いておられたのです。だからこそ、こんな行動をとられていました。最後２４－２５節にこうまとめられています。「**:24 しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、:25 また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。**」心のうちをご存じであったイエス様は、そのような者たちに自分の身をゆだねることはされませんでした。結局のところ主がここで求められていたこと、それは、表面的な従順ではなくて、完全な従順でした。自分の都合の良い時だけは従うようなそんな一時的なものではなくて、良い時も悪い時も心から従う、そんな継続的なものでした。救い主である方を心から認めて、たとえすべてを犠牲にしたとしてもこの方に献身的な礼拝をささげることが求められていたのです。それがすべての弟子に、すべての礼拝者に求められていたことでもありました。

　果たして私たちはこんな礼拝を日々ささげる者として歩んでいるでしょうか？どうです？私たちは大きな感謝をすることがあれば神様に感謝して、それ以外の時はもう忘れてしまっているかのように歩んでいないでしょうか？私たちは、自分自身の都合の良い時、自分自身の感情が高まっている時、自分自身の予定が空いている時は喜んで神様に従って、そうでないときは主を忘れたかのように歩んでいたりしないでしょうか？　皆さん、私たちは決して忘れてはいけません。私たちはどんなお方に礼拝をささげることができるのかということを、です。神の御子、神の子羊としてこの地上に来てくださったお方は、私たちのために十字架にかかられ、約束通り三日目によみがえって、ご自分を信じるすべての者に救いを、永遠のいのちを与えてくださったすばらしいお方でした。主イエスにあって新しくされた者たちは、かつての生き方に対してもう死んで、栄光に値するこのお方に心から献身的な礼拝をささげる者として、今新しく生きていくことができる者と変えられたのです。イエス・キリストを私たちが信じてそのように従っていくのであれば、私たちは、このような礼拝者として生きていくことができる者へと変えられました。そんなすばらしい特権に私たちはもう与っているのです。そうだとすれば私たちに問われるのは、神様が喜ばれる礼拝をささげていくのかどうか、ということです。そのような特権に、そのようなすばらしい幸いに私たちがもう与っているのであれば、そのすばらしい福音を、救い与えてくださった偉大な主をますます愛する礼拝者として、神の御子を愛する礼拝者として、今週も続けてともに歩んでいきましょう。